



塩尻 6 (『塩尻拾遺』) 天野信景

188

日本随筆大成

第三期

吉川弘文館

名古屋叢書第十八卷隨筆編一
昭和三十四年十二月二十日發行
編集兼発行者 名古屋市教育委員会



日本隨筆大成

〈第三期〉18

昭和五十三年一月十日 印刷
昭和五十三年一月二十五日 發行

編者 日本隨筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九二五二〈代表〉
振替口座東京〇一二四四番

製作 株式会社 たんちょう社

目次

塩尻拾遺（巻五十一）～巻百二十）……………一

（解題 北川博邦 小出昌洋）

塩尻拾遺

目次

卷五十一（芽垣内本）

辛卯神無月初五朝鮮の聘使

今度来りし韓人

友のいはく朝鮮琉球の人は

肥後国歴代事跡略

阿蘇十二所

筑紫風土記に

腹赤

景行天皇火の国に幸す

天平十二年八月靈符の版

関ヶ原役後

細川越中守忠興の室は

旧事帝王本紀に

三 維摩会の日

三 海東諸国記に

三 蒲生下野守秀行の家人

三 摂津国

三 桃符は

三 撥火杖

三 疫癘流行の時

三 人の逃亡せんとするを

三 千金方に

三 真野時繩

三 古へ官家の小児

元 摂家十二合の文書

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

撰家相伝正記
播磨国書写山

三五 鯨をほこにて突得る事
三六

卷五十二（芽垣内本）

書の君牙は

三〇 諸社御正体

三三

万国風俗の異なるは

三〇 熱田の御正体は

三三

元禄六年にや

三六 三州池鯉鮒の明神

四四

我尾城慶長の大営

三六 辛卯十一月二日

四四

或る人世をのがれ知多の浦に

四〇 近世娑羅双樹とて

四四

出家四不淨食は

四二 遺教経の

四五

百年前人の称

四二 東都護国寺の本尊は

四五

辛卯八月廿五日の夜

四二 雪のふる日

四六

菊池次郎武士

四三 熱田の八劔なる

四六

後水尾法皇御製

四三 去冬朝鮮へ

四六

或人のもとより

四三 朝鮮国全羅忠清等

四六

将田地一丈量起税

四三 質奴の

四七

卷五十三 (芽垣内本)

鑑銘に

咒 世に隱退を好み

五

昔大宮の内府妙音院

咒 又油虫とて

五

石清水社務職善法寺

五 物の直

五

讃と賛と

五 舍利又は設利羅

五

石密

五 府下林松寺

五

婦人重器を

五 東漸大師

五

勢州白子寺家村に

五 ことし二月三日

五

織田信長公御事の後

五 茶亭の庭路を

五

或俳諧師の門を

五 或る軍家者流

五

天に二日なく

五 冷笑富家翁

五

愛智郡中根の庄

五 中春望を花朝といふ

五

古井の庄

五 莽草

五

異邦には

五 或人曰く故実と云ふは

五

礼に曰く士に曰く

五 千観内供奉

五

源信僧都の筆せし

大准后宗子

五

百万返の念仏は

太上皇の法皇

五

婚姻に財を論ずるは

阿耨多羅三藐

六

人能く万錢を損じて

藐の漢音も亦

六

富貴利達を求めざる者

經書の中易にのみ

六

古に博くして

吾子先に云く伊勢に於て

六

卷五十四 (林本)

朱子説書乃学者

アンボン国に鳥あり

六

清康熙三十一年

倭俗云ふみさごの鮓とは

六

我大宝学令

壬辰の春関東への勅使

七

奥州平泉金色堂の仏像

土農工商は

七

伊勢内外宮の神人

花柳の娼婦梨園の旦童

七

宋の秦檜は

僧の盤泉

六

儒家の祭祀

尾城下より東都まで

六

鼈牛毛

今茲卯月柳營

六

朝鮮の三官使	充	半夏生は月令に出て	七
木ヶ崎の躑躅花神物となして	充	和州竜田神社	七
新上西川院崩御	七	異邦師巫の邪術	七
卷五十六 (芽垣内本)			
大女院崩御	七	默徳那国即回々祖国也	六
法華如説の修行とは	七	好婦美童	六
朱子曾て兵刑を論じ	五	我国本願寺の親鸞の徒	九
正五九月とて	六	事物の思ふやうにととのふるを	八
浮屠氏の結夏安居	六	吾子先にて七月十五日	八
豆州三嶋神社	六	浮屠氏四月望より	八
遠州秋葉の権現	六	周易禪解は	八
江州勢田及び城州宇治川辺	六	武州白銀台日吉坂に	八
六月初四伝教会に	七	唐徐徳が女	八
將軍家葬します時	七	正徳改元の秋	八

卷五十七 (芽垣内本)

六月の末漁者見よとて

五 今茲七月撰州以西

二

子なりし者なくなりし後

六 沙石集に見し奥州松嶋

三

秀靖神童二十三回の忌日

七 法心国師

三

屠蘇の屠

七 白川と名せし菊を

三

或る貴家に召使ひし女房

八 神無月の初め

四

美作国稲岡の枳社山誕生寺

九 大和に往きし僧

四

浄土宗四ヶの本寺の中

九 壬辰九月十一日関東御家人

五

太平記に載せし俊明極

六 八佾の舞

六

鎌倉大日記に

六 冬初書懷

六

一年の秋色

六

卷五十八 (芽垣内本)

尾州津島社異説

七 吳寛と云ひし人

一〇〇

覽初要集に

九 物の性は同じくして

一〇〇

人間万事老去りて無味	一〇二	京師瑞雲院児如来の縁起	一〇三
古へ詩歌に砧多く詠ぜし	一〇一	瑞竜鉄眼禅師は	一〇三
俗談に熱田の南門	一〇三	加賀国大聖寺の域は	一〇四
青山九覚入道	一〇三	なき者どもがみとせのなごり	一〇五
府下市井の商家某が子	一〇三	太神宮造酒物忌	一〇六
卷六十一 (芽垣内本)			
掩 _レ 涙別 _ニ 郷里 _一	一〇九	遠州秋葉山の下	一一三
風俗通に云く	一〇九	秋葉禅寺	一一三
神名式白山比咩神社	一一〇	イブセ	一一四
盲者の伝に	一一二	鉢は梵土の食器也	一一五
武州藪村の民	一一二	仏像の手に	一一五
一遍上人二河白道の心を	一一二	イカケ	一一五
癸巳閏五月十一日府下の商家	一一三	結構	一一五
孔子盗泉を不 _レ 飲	一一三	フサネ	一一五
我国弘法大師	一一三	相州賀茂郡走湯山	一二六

神祠の前へ獅子を置

二六

文月末の六日

二四

足曳日記の跋

二六

長月朔日先妣七々忌

二七

母なる人八十にてみまかり

二七

八月もなかの月

二八

北堂此の秋は

二〇

先妣追福の為に

二八

孟蘭盆の夕べ

二〇

母の往生のさまを

二九

夕道子とぶらひ侍りて

二〇

かたたくみし石

三〇

卷六十二 (芽垣内本)

浅野家の義士

二三

卷六十七 (内藤本・村井本)

莊子齊物論の始に

二三

正徳の初石清水八幡宮の

一五

文選に

二三

昔京師悲田院を置て

一六

京師人家の饌食

二三

去年癸巳安芸侯侍従吉長朝臣

一六

過去帳は

一四

貢使の琉球人

一六

凡そ形ある者は

一四

俗間の月花に

一六

(以上内藤本)

草木開花して

一三

元禄十六年京師工人の子

一四〇

南紀に移り住侍る僧

一三

小出侗齋半百初度の賀

一四二

安食庄常観寺

一三

攪レ睡禽声

一四三

冬至の前四日

一三

(以上村井本)

卷六十八 (都筑本)

或人孔子冕服の像を

一三

をちこちのたつきもしらぬは

一四九

今之楽は皆胡楽也

一三

陸奥の武隈の松は

一四九

南都興福寺維摩会

一三

西行法師奥の秀衡が家にて

一五〇

引声念仏は

一四

古へ我王政盛なりし時

一五〇

漢の時京師

一四

今仕官の身ほどに過て

一五一

種子袈裟は

一四

横田一角は

一五一

篠掛衣及び結袈裟は

一四

正徳二年八月より今茲九月に

一五二

古へ頭密の僧徒

一四

蘇利耶は

一五三

増賀上人辞世に

一四

明神

一五三

我熱田の神人に

一五三

今茲城南榮山にして

一五三

或曰仏書に

一五四

去し秋年饑て

一五四

神無月の末

一五五

京師にしても

一五五

尾州春日井郡小田井庄

一五六

鏡空忍清和尚は

一五七

卷七十七 (芽垣内本)

焦氏筆乘に

一五九

笠寺略縁起

一五九

海録碎事に

一六〇

此春尾府下或家のつづれ井

一六〇

東都諸木草花を売る家

一六一

四月の比より木曾路

一六一

忍岡桜多し

一六二

梅雨霽来りて

一六二

昔明兆殿司

一六三

夏宵書懷

一六三

弥生十八日東都浅草祭り

一六四

愁人夜独長

一六四

評定一座可ニ相心得

一六五

或人木曾路を上り

一六五

親子の情は天性にして

一六六

待舟和尚より

一六六

卯月三十日柳営何となく

一六七

卷七十八 (芽垣内本)

元陳繹曾	一六九	我国古今後素の妙手	一七〇
夏の初以来諸国疫疾流行	一七〇	六月廿四日有章公の御遺物	一七〇
外道四見	一七〇	星夕のころ	一七〇
或上人云く	一七一	古郷の文に	一七一
儒士二ツ山氏	一七一	七夕後一日	一七一
陶貞白が詩に	一七二	武蔵の名所よみける中に	一七二
武州に竹煮草とて	一七二	我が神廟	一七二
諸州の国宰	一七三	染井の売花家に	一七三
百人に一首の歌の	一七四	高野山の土地四所の大神を	一七四
水無月廿五日は	一七四	放生密寺の院主	一七五
兼井某は糺彈の	一七五	七月二十一日諸国巡察使を	一七五
衣と云ひ食と云ひ住所と云ひ	一七六	七月四日摂州大坂西北火災	一七六
午酔醒来晩	一七六	享保元年の秋	一七六